

審査結果の要旨

氏名 坂上 裕子

本研究は、母子を共変化・共発達する1つのシステムとして捉えるという前提のもとに、子どもの反抗や自己主張が顕著になることを契機に展開する母子の関係性の再編過程に焦点をあて、母親の側からそのプロセスを精緻に探究したものである。

本論文は全部で9章からなっている。1章は導入であり、2章でこの時期の母子の関係性に着目する意義が述べられている。3章では先行研究が概観され、従来の研究では子どもの発達の変化のみに焦点があてられてきたという点と、他者との協調性を重視するわが国では、この時期を理解するためには欧米の自我発達モデルの枠組みだけでは十分ではないという、2つの問題点が指摘され、その上で共発達という視点を導入する意義が述べられている。続く4章では研究目的と方法論が説明され、以下に4つの研究が行われた。

まず5章(研究1)では、母親の対応面の変化と子どもの発達の変化との関連性が1組の母子の縦断的事例観察の質的分析により検討され、2歳前後を境に、子どもの理解力の向上などの発達の変化に連動して、母親が子どもに理解や譲歩を求める対応や、強圧的な対応をとるようになることが示唆された。続く6章(研究2)では、この知見を確認するために、母親への横断的質問紙調査の分析が行われ、研究1を支持する結果が得られ、親はこの時期に子どもとの相互調整的な相互作用を可能にする、新たな対応を身につけることが確認された。そこで母親の対応の背後にある内的側面の変化を明らかにするために、7章(研究3)で子どもの反抗期に関する母親の受けとめ方を、質問紙調査における自由記述の分析から検討した。その結果、多くの母親が子どもの反抗や自己主張を両価的に受けとめ、葛藤的になることが見いだされた。そこでこの葛藤にいかに対処し、適応していくかを明らかにすべく、8章(研究4)で母親の面接調査により語りの分析が行われた。その結果、自己の視点を子どもの視点から捉え直すことにより、視点の統合が行われ、同時にこの過程で子どもの他者性が再認識され、子どもの視点と自己の視点の分化が進むということが示唆された。9章では今後の課題が述べられた。

論文は質的研究法と量的研究法をバランスよく用いながら、母子を共変化するシステムとして捉え、反抗期の母子の関係性の再編過程を実証的に明らかにした点で高く評価される。特に自己の視点と子どもの視点を調整するメカニズムの構築が第1子と第2子で異なって遂行されていくことなど、独創的な知見をいくつも明らかにし得たことは、今後の育児や発達研究に種々の示唆を与えるものである。母子をシステムとして捉える際の社会的観点の導入などの点で課題は残しているが、それは本研究の独創性を損なうものではない。以上の点から本論文は博士(教育学)の学位を授与するにふさわしいものと判断された。